

我が国を取り巻く安全保障環境

防衛省

目 次

01

我が国を取り巻く安全保障環境（中国）

02

我が国を取り巻く安全保障環境（北朝鮮）

03

我が国を取り巻く安全保障環境（ロシア）

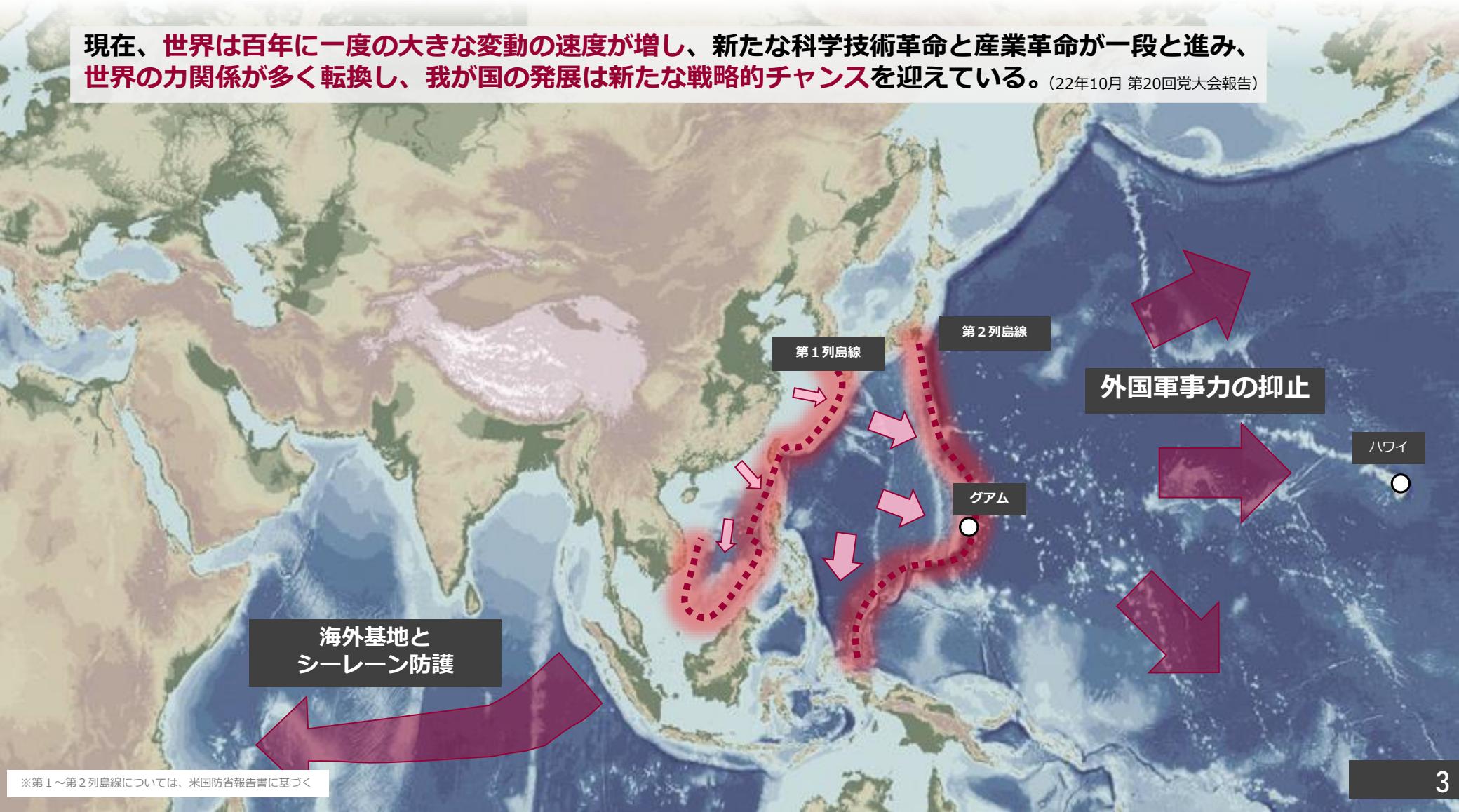
01

我が国を取り巻く安全保障環境（中国）

中国の戦略・作戦構想

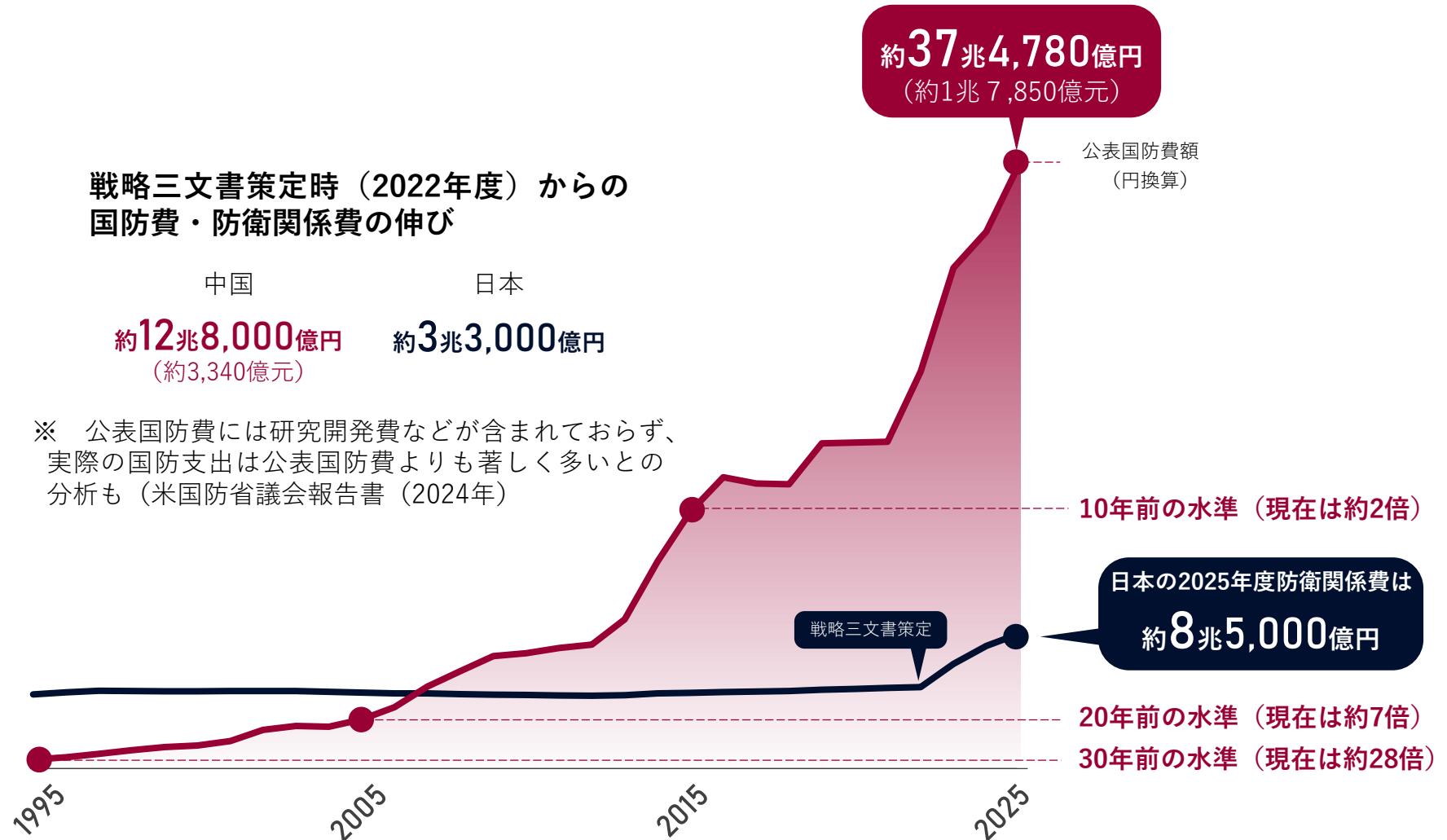
「中華民族の偉大な復興」を実現するため、中国軍を世界一流の軍隊に築き上げることを目標とする。

現在、世界は百年に一度の大きな変動の速度が増し、新たな科学技術革命と産業革命が一段と進み、世界の力関係が多く転換し、我が国の発展は新たな戦略的チャンスを迎えてる。(22年10月 第20回党大会報告)



中国の国防費の増加

急速な軍事力の強化の背景に、国防費の高い水準での増加。



(注) 「国防費」は、「中央一般公共予算支出」(2014年以前は「中央財政支出」と呼ばれたもの)における「国防予算」額。「伸び率」は、対前年度当初予算費。

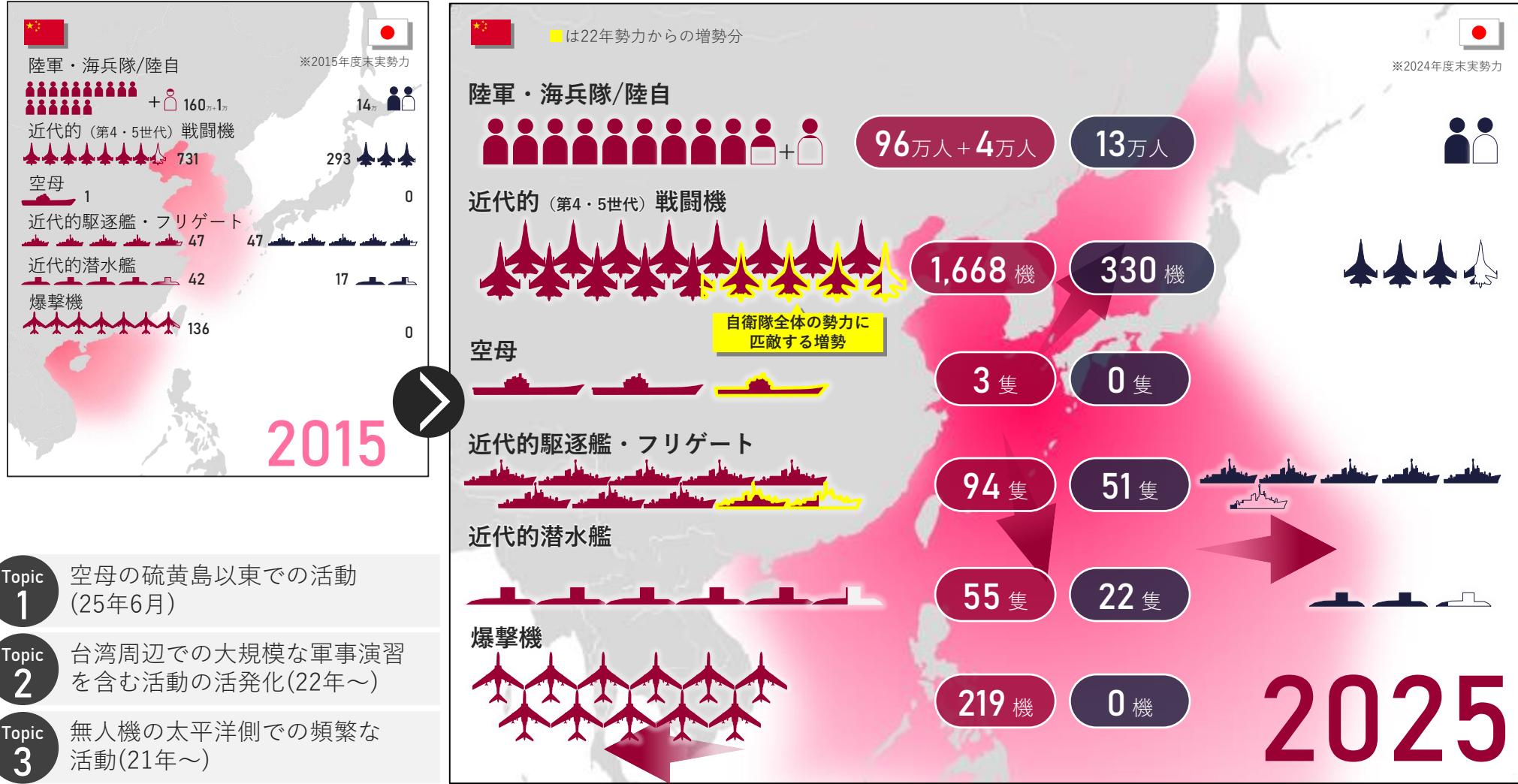
※1 日本の防衛関係費 (予算: 約8兆4,748億円) は、SACO関係経費、米軍再編関係経費のうち地元負担軽減分に係る経費等を除いたもの。

※2 円換算は各年度の出納官吏レートで計算。前年度比の数値は中国公表値による。

軍事力強化と活動の拡大・活発化

海上・航空戦力や核・ミサイル戦力を中心とした軍事力を広範かつ急速に強化。
海空域での活動を急速に拡大・活発化。一方的な活動のエスカレーションも。

日中の勢力比較及び中国軍の活動範囲(イメージ)(2015→2025)



(注) 資料は、ミリタリーバランス (2025)、Jane's Fighting Ships 2024-2025などによる。

(参考) 米軍勢力(2025)※インド太平洋地域以外も含む

陸軍 45万人 海兵隊 17万人 近代的戦闘機 2,204機

空母 11隻

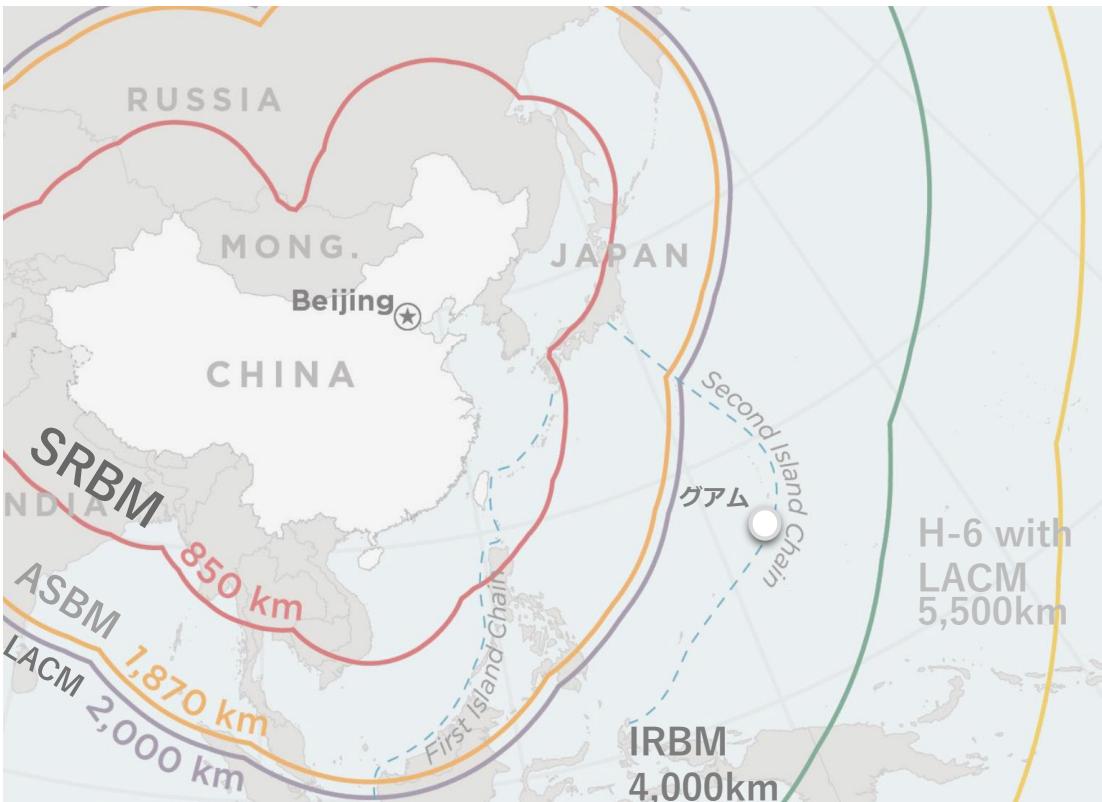
巡洋艦・駆逐艦等 111隻

潜水艦 66隻

爆撃機 120機

中国のミサイル戦力の増強

中国は核・ミサイル戦力の近代化・多様化・拡大に注力。2020年以降、迎撃がより困難である
極超音速滑空兵器(HGV)を搭載可能なMRBM運用を開始したとの指摘。我が国は中国の弾道ミサイルの射程圏内にある。



ミサイルの射程範囲

米国防省「中国の軍事及び安全保障の発展に関する年次報告書（2024）」

	2020	2022	2024
I C B M 大陸間弾道ミサイル (5,500km以上)	100発	300発	400発
I R B M 中距離弾道ミサイル (3,000-5,500km)	200発 以上	250発 以上	500発
M R B M 準中距離弾道ミサイル (1,000-3,000km)	150発 以上	500発 以上	1,300発
S R B M 短距離弾道ミサイル (300-1,000km)	600発 以上	600発 以上	900発
核弾頭	200発 以上	400発 以上	600発

中国が2030年までに保有する運用可能な
核弾頭数は1,000発を超えるとの指摘(*1)。
米国は2023年5月時点で約3,700発保有(*2)。

*1中国の軍事及び安全保障の発展に関する年次報告書（2024）

*2S I P R I Year Book 2024

中国の東シナ海での活動

中国は継続的かつ活発に活動し、力による一方的な現状変更の試みを執拗に継続。
中国の活発な軍事活動がわが国の安全に深刻な影響を及ぼし得る事態に。

Point 1 尖閣諸島周辺における現状変更の試み

✓ 1,000t級以上海警船の勢力増強



✓ 中国海警船年間接続水域内確認日数

✓ 中国海警船年間領海侵入件数

2012年
91日

2012年
23件

2024年
355日

2024年
39件

✓ 海軍艦艇が尖閣諸島周辺で恒常に活動

Point 3 無人機の活動の活発化

✓ 無人機の活動回数



Point 2 領空侵犯、領海内航行

24年8月、情報収集機が男女群島沖を領空侵犯

22年4月以降、海軍測量艦が屋久島周辺の領海内を9回航行

25年5月、尖閣諸島周辺海域において、中国海警船から発艦したヘリが領空侵犯

24年9月、空母遼寧が与那国島と西表島間の領海に近接した海域を航行

中国の南シナ海での活動

南シナ海においても、力による一方的な現状変更の試みを継続・強化。

資源やエネルギーの多くを海上輸送で輸入している我が国にとっても重大な関心事項。

西沙諸島

領有権を中国、台湾、ベトナムが主張
1974年、中国が全域支配

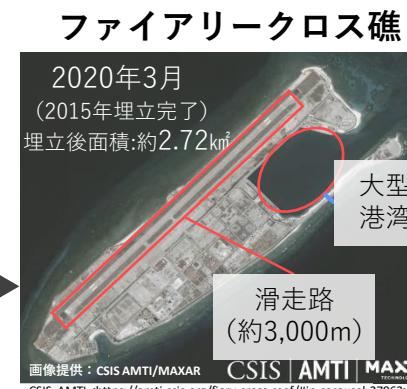
✓ 爆撃機などの軍事アセットの展開

最近では、25年5月にウッディー島にH-6爆撃機が展開したとの指摘

南沙諸島

7地形などの領有権を中国、台湾、ベトナム、
フィリピンなどが主張

✓ 7地形において急速かつ 大規模な埋立てを実施



日本のシーレーン
(イメージ)

✓ フィリピンを含む沿岸国への危険な行動



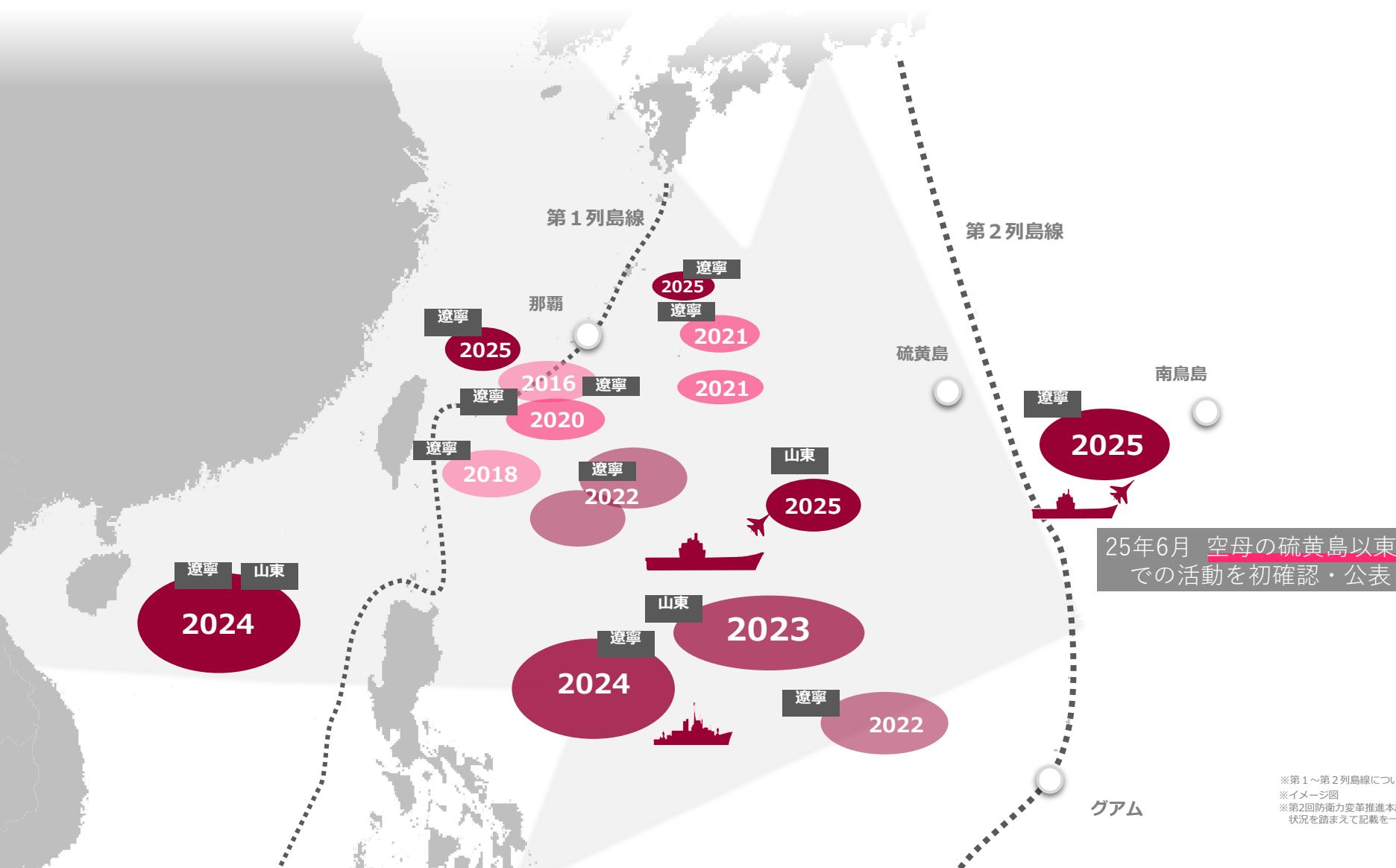
妨害活動は2022年頃から確認され、2023年以降増加。

衝突を含む危険な操船や放水と
いった妨害活動により、人的・物的被害が発生

サンビナ礁付近においてフィリピン海警船に衝突
する中国海警船 (24年8月)

中国軍空母の太平洋への進出

中国はいわゆる「第一列島線」を超える、「第二列島線」に及ぶ我が国周辺全体での活動を活発化。中国軍は、太平洋における運用能力を着々と向上させている。

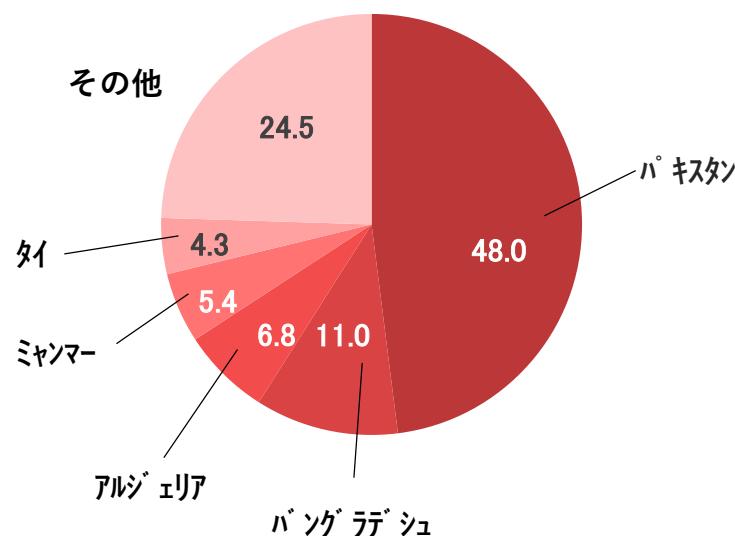


※第1～第2列島線については、米国防省報告書に基づく
※イメージ図
※第2回防衛力変革推進本部会議（令和7年11月21日）後の
状況を踏まえて記載を一部追加

中国による武器輸出について

中国は、ミサイル、戦車、無人機を含む航空機、艦艇などの輸出を拡大。武器輸出は友好国との間での戦略的な関係の強化、国際社会における発言力の拡大、資源の獲得に関係しているとの指摘。

主な武器輸出先 (2015-2024)
(輸出額による比較 パーセント)



武器輸出総額上位 10 か国
(2015 – 2024)

		100万ドル
1	米国	111,317
2	ロシア	41,857
3	フランス	26,155
4	中国	17,247
5	ドイツ	16,185
6	英国	10,328
7	イタリア	9,813
8	イスラエル	8,986
9	スペイン	7,568
10	韓国	6,049

(出典：SIPRI Arms Transfers Database)

02

我が国を取り巻く安全保障環境（北朝鮮）

北朝鮮の弾道ミサイル開発動向

現行の三文書策定以降も、核・ミサイル開発に邁進。新たな弾道ミサイルも登場。自らの優先課題に沿って開発・試験を着実に実施し、関連技術等を向上。

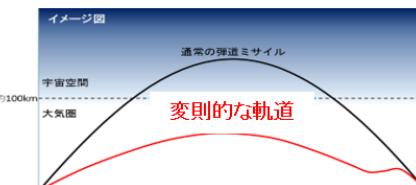
01 短距離弾道ミサイルの実戦使用

ウクライナに対する実戦使用を通じ、短距離弾道ミサイルの能力を検証。更なる能力向上を企図。



02 BMD突破のための極超音速兵器開発

新たな「極超音速ミサイル」を発射。ミサイル防衛網の突破を企図し、引き続き開発や能力向上を追求。



03 対米抑止のための長射程ミサイル開発

複数の固体式 ICBM 級が登場。再突入技術検証のための試験発射は未実施なるも、射程は米国全土を収める。



- 北朝鮮のミサイル防衛突破能力が向上。我が国の弾道ミサイル防衛がますます困難に。
- 北朝鮮が対米抑止力を十分に確保したと一方的に認識した場合、地域における北朝鮮による挑発行為が一層増加・重大化するおそれ。



北朝鮮による核開発の現状

核兵器の小型化・弾頭化を実現し、我が国を射程に収める弾道ミサイルに搭載可能。
また、核兵器開発のため、核分裂性物質の生産も拡充。

01 核兵器の小型化・弾頭化

過去6回の核実験を実施し、
核兵器の小型化・弾頭化を既に実現。

03 核分裂性物質の生産拡充

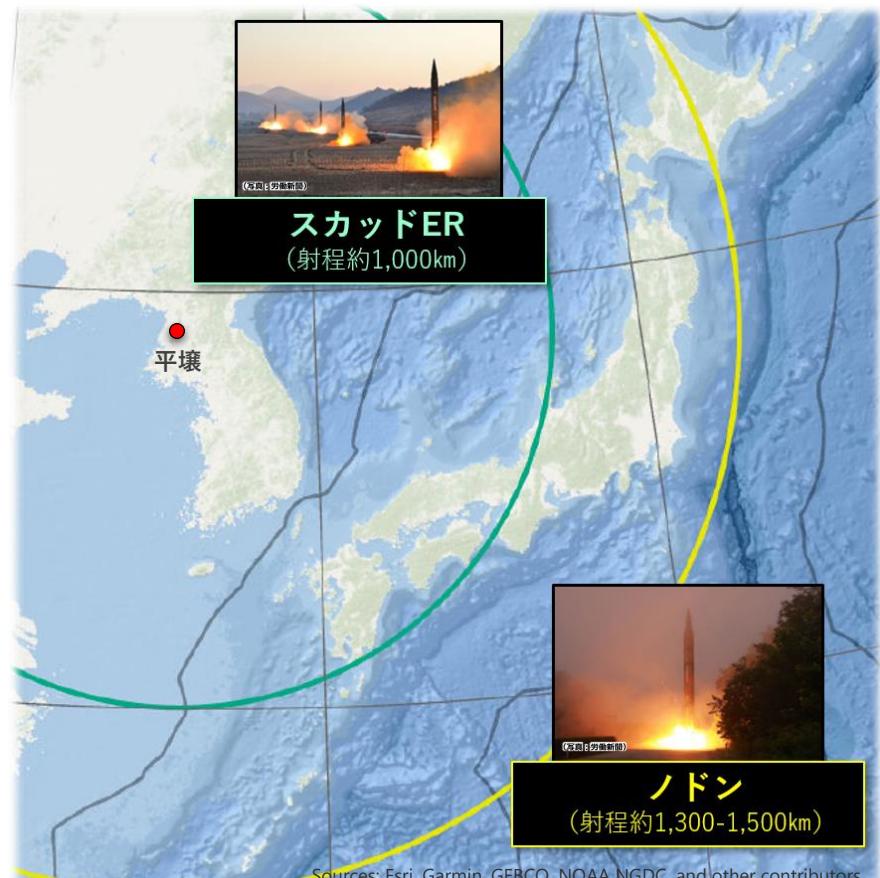


【北朝鮮が公開したウラン濃縮施設】

北朝鮮は兵器級ウランなどを継続的に生産。
約50発の核弾頭を保有していると指摘されている。
金正恩委員長は、核兵器開発のための濃縮ウランの
更なる増産を指示。

02 我が国は核攻撃の射程圏内

北朝鮮は、我が国に対する核兵器の投射手段として、
ノドンやスカッドERなどを使用可能。



※便宜上平壤を中心に、弾道ミサイルの到達可能距離をイメージとして示したもの。

露朝軍事協力の進展【1／2】

ウクライナ侵略が継続するなか、北朝鮮はロシアとの軍事協力を急速に進展。弾道ミサイルを含む武器・弾薬の供与に加え、兵士をロシアに派遣。

武器・弾薬の供与



- ✓ ウクライナは、ロシアが使用する弾薬の**約半数**が北朝鮮製と主張
- ✓ 2024年のうちに少なくとも**100発**の弾道ミサイルを供与

兵士の派遣



- ✓ 2024年終盤に**1万1000人**を超える兵士をロシアに派遣
- ✓ 2025年1月から3月には**3000人**を超える兵士を追加で派遣

※出典：MSMT第1回報告書等

北朝鮮とロシアの「包括的戦略的パートナーシップ条約」

※2024年6月署名、同年12月発効

第4条

「双方のうちいずれか一方が個別の国家または諸国から**武力侵攻を受けて戦争状態に****おかることとなった場合**、他方は、国連憲章第51条と北朝鮮、ロシア連邦の法に従って、遅滞なく自らが保有している全ての手段により、**軍事的およびその他援助を提供する。**」

露朝軍事協力の進展【2／2】

露朝軍事協力を通じて、北朝鮮の軍事力が中長期的に底上げされるおそれ。

01

弾道ミサイルのさらなる性能向上

北朝鮮の短距離弾道ミサイルがロシアに供与され、実際にウクライナに対する攻撃に使用。実戦使用を通じた北朝鮮製ミサイルの更なる性能向上が懸念される。

03

「新しい戦い方」の経験による戦術面での能力強化

ウクライナ軍との戦闘により、無人アセットの使用を含む「新しい戦い方」の様相を経験。この経験が北朝鮮軍全体に普及されるおそれ。

02

弾道ミサイルの生産体制強化

ロシアの需要に応えるため、弾道ミサイルの生産体制が強化されている可能性が指摘。ウクライナ侵略後、その生産能力が北朝鮮の軍事力整備に振り向けられるおそれ。

04

ロシアとの装備・技術協力の進展

北朝鮮は対ロシア支援と引き換えに、ロシアの装備品や技術を獲得する立場に。ロシアの核・ミサイル関連技術が北朝鮮に移転する可能性も。

仮に、ロシアの核・ミサイル関連技術が移転した場合、北朝鮮の「**極超音速兵器**」や「**再突入技術**」などの開発が大きく進展するおそれも。



北朝鮮の通常戦力強化

北朝鮮の通常兵器は大半が旧式化。他方、北朝鮮は近年「5か年計画」*を着実に進めつつ、通常兵器を広範に開発・改良するなど、通常戦力を強化する動きも。



「今後、党第9回大会は国防建設分野で核武力と常用武力（通常戦力）の並進政策を提示することになる。」

【朝鮮中央通信 2025年9月13日付】

陸上戦力



新型戦車



改良型多連装ロケット

海上戦力



新型駆逐艦



艦発型ミサイル

航空戦力・防空能力



空対空ミサイル



早期警戒機

無人アセット



自爆攻撃型無人機



大型偵察用無人機

*「5か年計画」：朝鮮労働党第8回大会（2021年1月）において、金正恩委員長が今後5か年の各種兵器の開発・保有に関する方針を表明。2025年末に期限をむかえるとされる。

03

我が国を取り巻く安全保障環境（ロシア）

極東方面・北方領土におけるロシアの軍備強化

ウクライナ侵略を継続するなかでも、ロシアは北方領土を含む極東での軍備強化を継続。核戦力を含む相当規模の戦力が存在するほか、新型装備への更新が進展。



極東ロシア軍の主な新型装備



ロシアの活発な軍事活動の継続

ロシアは我が国周辺での活発な軍事活動を継続。戦略核戦力によるミサイル演習を継続するほか、欧州方面では無人機の活動が活発化しており、欧州諸国は防空態勢強化を強いられている状況。

欧州方面での無人機の活動の活発化

25年9月、国籍不明無人機がノルウェー・デンマークの空港周辺で目撃され、空港が一時閉鎖



25年9月、ロシア無人機×19機がポーランド領空侵犯

25年9月、ロシア無人機がルーマニア領空侵犯

25年11月、国籍不明無人機がベルギーの空港周辺で目撃され、空港が一時閉鎖

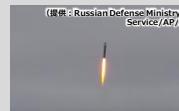


22年10月、23年10月、24年10月、
25年10月、戦略核戦力による
ミサイル演習を実施

戦略核戦力による ミサイル演習を継続的に実施



(写真: AFP=時事)



(提供: Russian Defense Ministry Press Service/AP/アフロ)



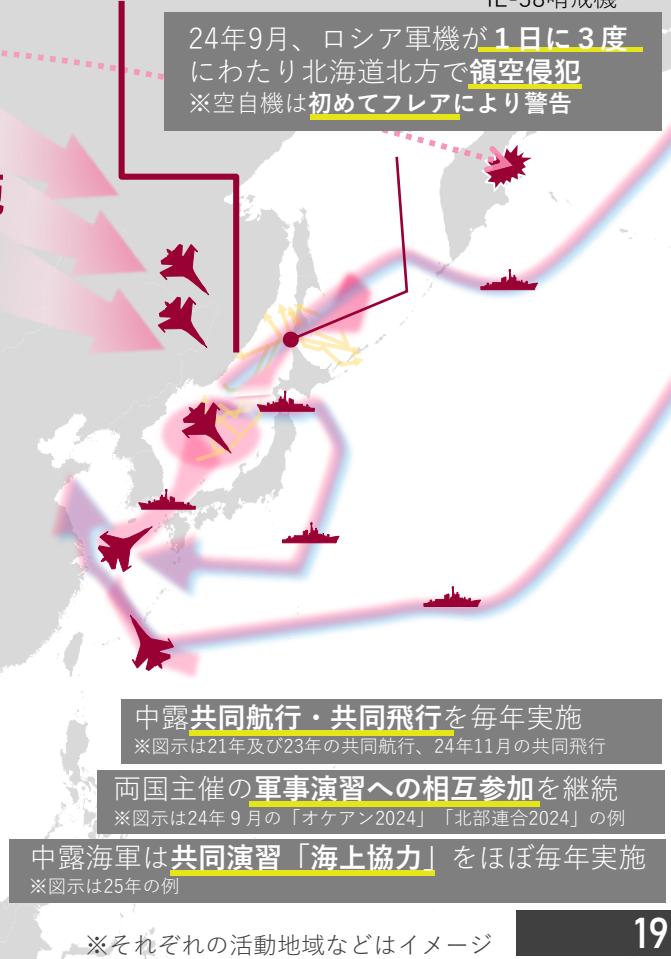
(写真: 経済報道発表資料 25/10/24)

ICBM「ヤルス」 SLBM「シネヴァ」

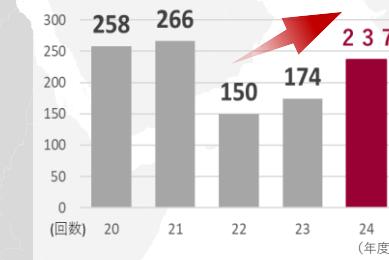
Tu-95戦略爆撃機

我が国周辺での 活発な軍事活動を継続

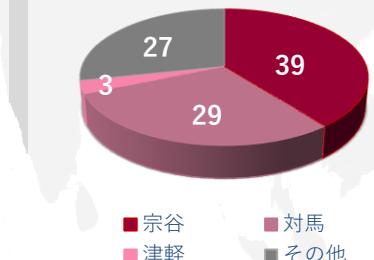
24年9月、ロシア軍機が1日に3度
にわたり北海道北方で領空侵犯
※空自機は初めてフレアにより警告



✓ロシア機に対する緊急発進回数推移



✓ロシア海軍艦艇の海峡通過隻数 (24年度公表分)



中露共同航行・共同飛行を毎年実施
※図示は21年及び23年の共同航行、24年11月の共同飛行

両国主催の軍事演習への相互参加を継続
※図示は24年9月の「オケアン2024」「北部連合2024」の例

中露海軍は共同演習「海上協力」をほぼ毎年実施
※図示は25年の例

※それぞれの活動地域などはイメージ



(写真: 空自HP)

※イメージ

Oフレア

(写真: 経済報道発表資料 25/9/23)

IL-38哨戒機

中露の軍事連携

各種演習、爆撃機の共同飛行、艦艇の共同航行などを通じ、両国の戦略的連携を強化。

双方の共同の努力のおかげで新時代に突入しその歴史上最高の水準に到達

2025年5月中露共同声明

海軍共同演習 「海上協力」

中露海軍は2012年以降、共同演習「海上協力」をほぼ毎年実施。年々演習内容を拡充、深化。
※近年の例では、24年に南シナ海、25年は日本海で実施。

(図示は25年の例)

爆撃機の共同飛行

2019年以降、爆撃機の共同飛行を毎年1~2回実施。
24年11月には、核を搭載可能な空中発射型弾道ミサイルを搭載できるとされる中国軍のH-6N爆撃機の参加を初めて確認。
(図示は24年11月の例)



活動地域
(イメージ)

軍事演習への 相互参加

2018年以降、両国が主催する軍事演習への相互参加を継続。

(図示は2024年9月の「北部連合2024」の例)

艦艇の共同航行

2021年以降、共同航行を毎年実施。活動海域は拡大。

(図示は21年及び23年の例)

